宿題を忘れたらおしりぺんぺんされる学校。いつも男子が罰を受けるが遂に女子も忘れてしまい・・・

とある学校の3年B組の教室の朝。生徒たちは楽しそうに喋っていた。高杉健太は隣の拓也と一緒にスマホの画面を覗き込んでいた。「この前のゲームクリアした？」「いや、まだボスで詰まってるよ。お前はどう？」そんな他愛もない会話が続いていたが、健太の心の中では小さな不安が芽生え始めていた。昨夜、ゲームに没頭しすぎて宿題の数学の問題集を全く手をつけていなかったのだ。しかも持ってくるのを忘れたらしい。鞄の中をそっと探ってみたが、入っていない。

チャイムが響き、担任の佐藤先生が教室に入ってきた。「おはようございます。席に

ついてください。今日もまず宿題のチェックから始めます」名簿を手に取り、一人ひとり名前を呼び始める。提出できた生徒はノートを掲げ、先生が頷く。健太の番が近づくにつれ、心臓の音が耳に響くようになった。「体調が悪かったって言おうか……いや、そんな嘘バレるよな」葛藤が頭の中を駆け巡る。隣の拓也がちらりとこちらを見て、怪訝な顔をするが、健太は目を逸らした。

「高杉君」

呼ばれた瞬間、周囲の視線が一気に集中した。健太はゆっくり立ち上がり、鞄をもう一度探るふりをする。「あの……先生、忘れました」声が上ずってしまった。クラスに小さなざわめきが広がる。「また男子か」「うわー、てことはあの罰？」女子たちの小さな囁きが耳に届き、健太の頬が熱くなる。先生はため息をつき、名簿に

チェックを入れる。「ルール通り、罰を受けなさい。教壇へ来てください」その言葉に、健太の足が重くなった。クラスメートたちの視線を浴びながら、ゆっくりと歩く。男子の友達たちは同情の目を向けるが、誰も声をかけない。女子たちはすでにくすくすと笑いを抑え始めていた。

教壇に立つと、先生が淡々と指示を出した。「ズボンとパンツを膝まで下ろして、前に向いてください」健太の心臓が激しく鼓動する。「本当にやるのか……女子の前でちんちん晒すなんて、死にたい」手が震え、ベルトに触れるのも躊躇う。クラスを見渡せば、30人の目が自分に注がれている。前列のみ美咲は目を丸くし、さくらは口元を押さえ、結衣はすでに頬を赤らめている。健太は深呼吸をし、ゆっくりベルトを外した。